慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	釈尊と修道士 : バルラームとヨザファト
Sub Title	Gautama Buddha and the Monks Barlaam and Josaphat
Author	坂口, 昂吉(Sakaguchi, Kokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.76, No.1 (2007. 6) ,p.131- 135
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究余滴
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070600-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究余滴

釈尊と修道士—バルラームとヨザファト—

坂口昂吉

現在の仏教とキリスト教には共通点が多い。例えば、仏教では諸行無常を唱えるが、キリスト教でも神の国を待望する意味で現世の果敢なさ空しさを説く。またキリスト教では天国と地獄を唱えるが、仏教でも極楽と地獄を説く。しかしこの一致は、両宗教がもともと同一の教えを持っていたからではない。互いに学び合って相似た教説を採用するに至ったのである。即ち、無常観はキリスト教が仏教から学んだものであるし、地獄・極楽は仏教がキリスト教から学んだものである。しかし二つの宗教互いの学び合いを、歴史的につきとめることは殆んど不可能である。両者の辿った長い歴史の流れと、地理上の大きな隔たりは、その中に錯綜する無数の史実と相俟って、厳密な立証を困難にするからである。

しかし、仏教の無常観がキリスト教の天国・地獄の考えと結び合った幾つかの代表的実例を、かなり古い時代について挙げることは可能である。そのような意味で典型的な史料の一つが、ここで述べる『バルラームとヨザファト』の物語である。

これは西洋の中世に広く普及した宗教物語であって、釈尊の伝記のキリスト教版といってもよい。それはまたヨーロッパ修道制の起源とは言えないが、特にその隠修士—荒野で孤独な修道生活をする人々—の誕生と深い関係がある。この物語の叙述は、ダマスコの聖ヨハネ（c. 675–749）の著作中にある。彼は父セルギウスの後をついで、アラブの宮廷に仕えた。だが彼は、自分のキリスト教信仰と統治者のイスラム教との葛藤のためと思われるが、職を辞して修道士となった。彼は東方の代表的神学者であって、『正統信仰について』を初めとする著作

は、ギリシア語からラテン語に訳されて、西方でのスコラ学の発達に大きな貢献をした。彼はまた聖画像をめぐる論争に参加し、その崇敬を支持した点でも有名である。

『バルラームとヨザファト』の物語りの原点は、St. John Damascene, Barlaam and Joasaph, London, 1983 (Loeb Classical Library) の中にあり、ギリシア語とその英語対訳から成っている。因みにその刊行者は、G. R. Woodward, ; H. Mattingly ; D. M. Lang である。またこれと同じ物語の簡略化したラテン語版が、Jacobus de Voragine (c. 1230-c. 1298) の著作の中にある。即ち、Jacobus de Voragine, Legenda Aurea, ed. by Th. Graesse, Osnabruck, 1969, p. 811-823 である。なおこのテキストには邦訳もある。即ち、ヤコブス・デ・ウォラギネ著、前田敬作・山中知子訳『黄金伝説』四、人文書院、一九八七年、p. 374-399 である。なお本稿ではロエブ版に従ってその概要と特色を述べてみたい。

本書は三つの部分から成り立っている。即ち（A）物語、（B）教義の説明、（C）Apologus（譬え話による教訓）である。

（A）物語

キリストの十二使徒の一人である聖トマスがインドに布教するために送られた。そして多数のインド人が迷信と偶像崇拝を捨て、真の信仰に入った。そしてエジプトで修道制が形成され始めると、修道士たちの高徳の名声が遠く地の果にまで及び、インドにも届いた。そこで多くのインド人がキリスト教徒になったばかりでなく、すべての財産を抛棄して荒野に退き修道士となるものすらあった。しかしやがてインドで Abenner という王が立った。彼はキリスト教徒を迫害し、特に修道士を苛酷に弾圧した。この王にはなかなか世継が生まれなかったのであるが、遂に待望の王子 Josaphat が誕生した。だが誕生の祝いの際に、ある優れた占星学者が、この王子について彼が成人の後にはキリスト教徒になるであろうと予言した。このことを恐れた王は、王子を宮殿に幽閉し、外界との接触を絶ったのである。

しかし王子はある時、たまたま外出の機会に恵まれた。そして人間が生老病死という苛酷な運命を負っていることを見聞して悟り、深刻な悩みを抱くに到った。しかるにこの時、Barlaam というキリスト教の修道士が商人に

変装して宮殿に王子を訪ねた。彼はJosaphatに、キリスト教徒になり、世を捨てて修道士となることにより、人生の悩みを克服せよ、と奨めたのである。これに驚いたAbenner王は、種々の策略を凝らし、特に女性をけしかけて、王子の求道の心を覆そうとした。しかし王子はそのような誘惑に屈することなく、キリスト教徒になってしまったのである。その後、王子Josaphatは、王Abennerと王国を共同統治し、善政を布した。やがて父王もまたキリスト教に改宗して没した。単独統治者となったJosaphatは、王位を友Barachiasに譲り、修道士となった。そして彼は荒野に赴き、師Barlaamと再会、共に修道生活を送ったのである。

この物語は、トルストイの『告白』に、仏陀すなわち釈尊の話として収録されている。しかしそれのみでなく、Larita Vistara（『方広大荘厳経』）や『過去現在因果経』など仏典にある釈尊の生涯と酷似している。したがってこの物語が仏教的背景をもつことは確かである。

なおこの物語は仏教圏についでマニ教の影響下に入り、さらにアラブ及びペルシアの世界に受けいれられた。因みに王子のJosaphatもしくはJoasaphという名は、アラビア語のYudisatfから由来した。そしてこのYudisatfは、釈尊の別称Bodisattva（菩薩）の変形である。なおこの物語は、アラブやペルシアのテキストから、グルジア語に訳された。ここに最初のキリスト教版が生じたのである。

そしてこのグルジア語版からギリシア語版が訳出されたのであり、ここに掲げたダマスコの聖ヨハネのギリシア語版もその一つなのである。さらにギリシア語版からラテン語版が訳出された。ヤコブス・デ・ウォラギネ（c. 1230–c. 1298）の『黄金伝説』中にあるラテン語版もその一つである。そしてラテン語版からヨーロッパ各国語訳が多数生じた。なおローマ・カトリック教会の公式文書で一五八四年に作製されたMartyrologium Romanum（『ローマ殉教録』）の中に、バルラームとヨザファトの名が、Cesare Baronius（1538–1607）により付加されている。そして両聖人の祝日は、十一月二七日である。まさに釈尊は彼の師と共に、カトリック教会の聖人とされているのである。因みにこの物語のキリシタン版として、『聖ばるらあんとじょざはつの御作業』があることも付記したい。

（B）　教義の説明

この『バルラームとヨザファト』という物語は、釈尊の生涯のキリスト教版として描かれている。またそれは一貫して諸行無常すなわち生老病死という人生の空しさを説き、その解決として修道士の道とくに荒野で孤独な生活をする隠修士の生き方を掲げている。この俗世を捨てての隠修士の生き方も、のちにキリスト教の修道制の一形式とはなったが、もとはと言えば、インドの修業者の生き方、即ち釈尊の出家の道に即したものと言ってもよい。ただしこの物語の仏教的な色彩はここまでである。そこには、キリスト教の教義の全体的説明が仏教的な雰囲気と並存して説かれているのである。まず第一に三つの位格と唯一の実体をもつ神の存在が主張されている。第二に神による世界と人間の創造が説かれ、人間が神の似姿であるのに、原罪を犯して堕落したことが述べられている。第三に、救い主キリストの受肉とその生涯および十字架上の死が述べられる。第四に、キリストの復活・昇天・聖霊降臨・世の終りと最後の審判の教えが説明される。ここに見られるキリスト教教義の説明は、純粋に正統派的であり、かつ体系的であり、その点で確固たるものである。特に天国と地獄の教えは繰り返し提起されている点にも注目したい。

さらにそこには、当時論争の的であった聖画像崇敬の全面的肯定が見られる。それはダマスコの聖ヨハネの面目躍如たるものである、と言えよう。このような特色から見て、この物語はたとえ仏教的背景を持ち、マニ教の影響を受け、アラブやペルシアのテキストが媒介となり、グルジア語版という先行者があり、ほかにもギリシア語訳があったにせよ、やはりダマスコの聖ヨハネもその作者たちの重要な一員であったことは疑いえない、と思われるのである。

なおこの物語の含む教義の説明について重要な点は、本書が初代のキリスト教著作家のテキストを含んでいることである。中でもAristides（二世紀）のApologia（『護教論』）のギリシア語テキストが、本書の中に収録されている事実は、史料的に見て極めて重要である。

（C）　Apologus（譬え話による教訓）

この物語は、修道制とくに隠修士の生活の讃美に終始しているのであるが、それを説くために常に譬え話を用いている。その重要なものについて、表題を列記したい。

①王の兄弟と死のラッパ。②四つの箱。この話は「二つの箱」という主題になってシェクスピアの『ヴェニスの商人』に現われる。③漁師とナイチンゲール。④ある人と一角獣。この話はトルストイの『告白』の中にそのまま収録されている。⑤ある人と三人の友。⑥一年間だけの王位。⑦王と貧しい夫婦。⑧金持と乞食の娘。⑨飼いならされた氈鹿。⑩人を欺く悪魔。以上の十話である。

これらの譬え話はすべて仏教説話の特色である無常観を基調としている。だがキリスト教的な天国と地獄の観念が入っているものとして、②、⑤、⑥、⑦、⑧が見られる。またその多くが、キリスト教の隠修士的生活を讃美している。しかしこのような荒野での孤独な生活は、インドの出家した修業者の基本的類型にも合致すると言ってよいであろう。

以上に述べた（A）物語、（B）教義の説明、（C）譬え話による教訓、という本書の三つの側面を通じて次のように言えるであろう。第一に、すでに八世紀において、仏教とキリスト教は各々の特色を生かしながら、渾然一体となった見事な結晶を生みだしていたことである。ここでは、仏教の無常観と、キリスト教の天国と地獄の観念が基盤となって、優れた叙事詩を生み出しているのである。釈尊の生涯とその基本的な思想が、キリスト教の修道理想の衣を着て描かれているのである。これは異なる宗教が和合して、人々の心を潤す好ましいあり方が示されていると言えよう。ただし未来の仏教とキリスト教の和合ないし綜合を求めるに当って、実践の上での協同が望ましいのは言うまでもないが、両者の教えの基本的相違を歴史的に自覚することが必要であろう。そうしてこそ初めて、二つの宗教が互いに学び合って、相手の長所を自らにも取り入れる可能性が生ずるのである。